

学校教育にも取り入れられた 音で伝える日本の文化

和楽器演奏は女性の嗜みだった

日本の芸能に欠かすことのできない和楽器にはいろいろな種類があります。主に宮中や寺社などで演奏される雅楽用の楽器、平家物語で知られる琵琶、そして民謡や長唄、日本舞踊などで演奏される三味線（三弦）、琴、笛などです。このうち、一般にも馴染みの深いのが琴や三味線でしょう。音楽関係のお稽古ごととすると、もっぱらピアノやバイオリンを習う人が多いようですが、数十年前までは琴は女性の嗜みの一つとされていました。

中部和楽器商組合の前身である愛知商工組合は大正時代にはすでに結成されていたようで、当時は100軒ほどが加入していたようです。昭和20年代には愛知和楽器商組合となり、現在の中部和楽器商組合になったのは昭和40年代の半ばだとされています。そして昭和48年のオイルショックの頃を境にして琴や三味線を習う人が減少し始めました。

将来の需要拡大に期待

かつては材料の調達から始まり、全ての製作工程を一人の職人がおこなっていましたが、いまでは分業体制となり、例えば三味線などは胴、竿、糸巻き



などを別々の職人さんが製造します。それらを和楽器屋さんで組み立てて販売する形になっています。和楽器屋さんごとに三味線や琴といったそれぞれの得意分野はありますが、取り扱う楽器については精通していなければなりません。しかも、微妙な音程も聞き分けられる確かな耳も必要です。当然、何年もの修行が必要になります。また、和楽器の業界は世襲制で暖簾分け、兄弟分けが一般的です。得意分野は親から子へと伝承できますが、そうではない分野は修行によって身に付けます。ただし、需要が減少しているため、後継者を育成することが難しくなりつつあります。

平成14年度から和楽器が学校教育の中に取り入れられました。教材用に高価な楽器は使われませんが、底辺の拡大には期待がもてます。組合としては和楽器の先生たちへの講習会を開いたり、先生たちが実施するワークショップへ協力をするなど、将来の和楽器需要の拡大に向けた取組みもおこなっています。

DATA ■ 中部和楽器商組合

所在地：昭和三区広路通7-12

- ・大正時代：愛知商工組合を結成
- ・昭和20年代：愛知和楽器商組合を設立
- ・昭和40年代：中部和楽器商組合に改組